

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2254 号

Review of early endoscopic findings in patients with local recurrence after definitive chemoradiotherapy for esophageal squamous cell carcinoma

食道扁平上皮癌に対する根治的 CRT 後の局所再発患者の早期内視鏡所見の検討

山本 陽一 (やまもと よういち)

博士 (医学)

#### 論文内容の要旨

根治的化学放射線療法 (dCRT) 後の局所再発は、再発の診断が早期に行われた場合、サルベージ内視鏡治療により臓器温存したまま治癒できる可能性がある。本研究は、局所再発における早期の内視鏡所見について調査することを目的とした。2008 年 1 月から 2012 年 6 月の間、dCRT が施行され完全奏功 (CR) となった後に転移を伴わない局所再発へ至った、食道扁平上皮癌患者 17 例を対象とした。局所再発時の内視鏡画像とそれ以前の画像と比較し、局所再発を示唆する所見を認めるかを評価した。また、経過観察スケジュールとその後施行されたサルベージ治療についても調査した。局所再発時の内視鏡所見は、粘膜下腫瘍 (SMT) 8 例、潰瘍 5 例、びらん 4 例であった。局所再発以前の画像の見直しにおいて、局所再発を示唆する所見を 7 例で認め、その所見は SMT 6 例とびらん 1 例であった。その局所再発を示唆する病変は全て 10 mm 未満であった。これらの局所再発を示唆する所見は局所再発時には変化しており、SMT 3 例ではより大きな SMT、SMT 3 例では潰瘍、びらん 1 例では潰瘍に変化していた。局所再発時に cT1 と診断した 12 例において、4 例 (33%) で 1 か月以内に経過観察の内視鏡検査が施行され、11 例 (92%) でサルベージ内視鏡治療が施行された。dCRT が施行され CR となった後の経過観察内視鏡検査は、局所再発を示唆する所見を内視鏡検査で認めた場合、短い間隔 (1~2 か月) で施行する必要がある。内視鏡医は、SMT やびらんは、10 mm 未満であっても局所再発に至る可能性のある重要な所見であることに注意する必要がある。